3月度

ビクトリー御書
VICTORY★GOSHO

「上野尼御前御返事」（烏竜遺竜の事）

法華経と申すは、手に取ればその手やがて仏に成り、口に唱うればその口即ち仏なり。譬えば、天月の東の山の端に出ずれば、その時即ち水に影の浮かぶがごとく、音とひびきとの同時なるがごとし。故に、経に云わく「もし法を聞くことあらば、一りとして成仏せざることなけん」云々。文の心は、この経を持つ人は、百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人もかけず仏に成ると申す文なり。

（御書新版１６８９ページ・御書全集１２２０ページ）

通解

法華経というのは、手に取れば、その手が直ちに仏に成り、口に唱えれば、その口がそのまま仏である。

譬えば、天の月が東の山の端に出れば、その時、直ちに月の影が水に浮かぶように、また、音と響きが同時であるようなものである。

ゆえに、法華経に「もし法を聞くことがあれば、一人として成仏しない者はいない」と説かれている。

文の心は、この経を持つ人は、百人は百人全て、千人は千人全て、一人も欠けることなく仏に成るという文である。

誰でも負けない力を引き出せる！

よくわかる解説

みなさんこんにちは、サンです！　今月も元気に御書を学んでいこう！

今回学ぶ「上野尼御前御返事」は、１２８０年（弘安３年）１１月、駿河国（現在の静岡県）の門下である南条時光の母・上野尼御前に送られたお手紙です。上野尼御前が、父の命日にあたって、大聖人にご供養したことへの御返事が本抄です。

大聖人は本抄を通して、法華経は、花が開いた時にすでに実がある蓮華と同じように、原因と結果が同時にある経典だと教えられます。本来、花というのは「因」である花が先に散ってから「果」である実がなります。しかし、法華経では、その「因」（修行）と「果」（成仏）が同時に存在すると説かれているのです。

御文の中で大聖人は、法華経を信じて、手に取り、口に唱えれば、直ちに仏になると仰せです。その例えとして、“月が出れば、その影が水に浮かぶ”“音と響きが同時である”ことを挙げられ、題目を唱えた瞬間に、自身の心に本来具わっている仏の生命が現れることを示しています。

さらに、法華経に「もし法を聞くことがあれば、一人として成仏しない者はいない」と説かれている通り、この法を持てば、一人も欠けることなく成仏できると教えられています。

成仏とは、特別な存在になったり、現実世界を離れたりするのではなく、誰もがありのままの姿で苦難に負けない力を引き出すこと。そのために、私たちができることが、日々の勤行・唱題なんだ。真剣に祈る中で、“苦手な科目に取り組もう“部活動の練習を頑張ろう”と、挑戦の意欲が湧いて、より大きな力を発揮することができるよ。

池田先生は、次のように語っています。

「仏法の祈りは『誓い』です。『必ず実現してみせる』と決める祈りです。そう決意を固めるから、本気で努力できる。努力するから、祈りを実現できる自分になるのです」

信心根本に努力を重ね、晴れやかな新学期を迎えよう！